商いの新しいものさし

㈱商い創造研究所
代表取締役
松本 大地

第168回

ダイバーシティで成長を続けるメルボルン

コロナ災禍により、長年続けてきた海外団体視察は4年近く中断を余儀なくされたが、11月に街づくりや商業空間の研究をする賑わい創研会員メンバーとオーストラリアのメルボルン視察を実施した。今回「ダイバーシティ（多様性）」をテーマに掲げ、英国エコノミスト誌にて2011年から7年連続で「世界で最も暮らしやすい都市ランキング」第1位に選出されたメルボルンの都市街づくりを探訪した。

世界140都市を対象に文化活動、環境、教育、インフラの整備などを点数化してランク付けした高評価が示すように、メルボルンは40年間で2倍の人口580万人に達し、23年にはシドニーを抜きオーストラリア第1位の都市になった。

「その磁力は何か？」を問うと、答えはダイバーシティが確立していることだった。多様性の逆は一様性。一様性とは互いに似通って、同じようなありふれた様子のことだが、グローバル化社会では人種・国籍・性・年齢を問わず、多様な人が平等に活躍できる機会があると、ビジネス環境の変化に柔軟、迅速に対応できると多様性を重んじるようになった。

オーストラリアは建国当時から多くの移民を受け入れ、現在は全人口の25%が外国生まれの国。メルボルンでは世界200カ国の異文化が深く根を下ろし、中華街、ベトナム人街、ギリシャ人街、イタリア人街や、インド、ユダヤ、韓国、中東・東欧各国などのコミュニティが至る所に存在する。

メルボルンでは「移民が増えると社会秩序が乱れる」という発想はなく、この国に住む以上はそのルールに従う姿勢を持った人々が集まり、多種多様な文化が融合する多国籍社会が確立されている。多国籍社会では物事を一つの視点だけでなく、異なる視点や角度から捉える大切さが養われ、それが大きなパワーになった。そこには日本が抱える人口減少、少子高齢化、地方の過疎化、貧困化、ジェンダー不平などなど、さまざまな社会課題を解決するヒントが内包されている。

多様性で人々を魅了するのは「サバーブ」という中心業務地区（CBD）以外の周辺地域で、メルボルン都市圏には321のサバーブが存在する。地域独特の雰囲気を持つサバーブこそが多様性の魅力を発揮し、中心部から近い「フィッツロイ」と「コリングウッド」もその一例である。

芸術的でボヘミアンな雰囲気で隣り合わせのサバーブを形成するフィッツロイとコリングウッドは、歴史を感じさせる建物に個性あふれる店舗が並び、斬新なストリートアートと共存した街並みが形成され、流行に敏感な人たちが集まる。約1300m×約800mの2つのサバーブは外に開かれたレストランやカフェ、ビアバー、ワインバーが軒を連ね、ヴィンテージショップやオリジナリティ溢れる雑貨、ファッション、ステーショナリーや食料品などが街路に賑わいを醸し出す。世界一とNYタイムズで称賛されたクロワッサンの専門店「ルーン・クロワッサン」もこのサバーブから生まれた。周辺にはチーズケーキ、ドーナツ専門店、スペシャルコーヒー店、さらに今年8月にはクリエイティブな存在感がある125室のブティック・ホテル「ザ・スタンダードX メルボルン」がオープンした。感度の高いストリート・カルチャーが古い街並みに新しいエネルギーを注入し、アート、文化、喧騒が1つの刺激的空間として混ざり合い、常に斬新なカッティング・エッジが生まれる。

フィッツロイに誕生したスタンダードホテル

今回同行したデベロッパーやデザイナーもこの都市景を見て、「SCでは出すことができない魅力だ」と語った。筆者はこの魅力的なクリエイティビティは、日本の大都市でも中心部から離れたサバーブにこそ可能性があると見る。カギは「ローカルコミュニティ」。単なる人々の集合体ではなく、共通の価値観から良好な関係性が育つかが重要だ。地域特有の歴史や文化、暮らしの変遷を垣間見られるのは商店街や街道であり、地元愛による親近感、素敵な偶然に出会い、予想外のモノやコトやヒトを発見するセレンディピティがあれば、メルボルンのサバーブに近づくだろう。

ユニークな新業態が育つのはSCではなく、サバーブからの個店であり、スタートアップ人材が活躍できるチャンスが広がる。世界から注目されるメルボルンには、日本の商業街づくりだけでなく、社会課題を解決する処方箋が満載されている。